Viva Kango

No.47

Campus News of Japanese Red Cross Hokkaido College of Nursing

〒090-0011 北海道北見市曙町664－1 TEL（0157）66-3311 FAX（0157）61-3125
mail to:kouhou@rchokkaido-cn.ac.jp http://www.rchokkaido-cn.ac.jp

発行日／2018年3月1日
編集・発行／広報委員会

日本赤十字社
Japanese Red Cross Society
日本赤十字北海道看護大学

ザ・卒業生

北見赤十字病院 看護師 上岡 文

皆さん、初めまして。私は皆さんと同じようにこの大学の三期生として学び、卒業して、北見赤十字病院に就職しました。就職して間もなく起きた福知山線脱線事故の報道や、赤十字が行う様々な救援事業に触れたことで、自分が赤十字の看護師であることを強く意識しました。それからは災害救護や国際救援開発協力に携わることを目標に、日々の業務に取り組んできました。

とはいえ、特別なことをしてきた訳ではありません。赤十字の原則である、「人道」を常に念頭に置いて看護をすることを意識しています。相手が何に困っているのか、どんなことに苦しんでいるのか、自分だったらどうか、相手に関心を持って接することを大切にしています。

昨年の秋に私はバングラデシュの避難民救援事業の医療チームメンバーとして派遣されました。六十万人以上の人々がミャンマーを追われ、バングラデシュに避難しています。ある日家族を失い、家を焼かれ、言葉の通じない外国に広い河を渡って逃げなければならなかった彼らを思うと、どんなことでもいいから何か手助けしたいと思いました。

【診療の様子】
外傷も多いので処置をして通院で創傷管理をします。

避難民は、山を切り開き、竹とビニールシートでテントを建てた中で暮らしています。平均三〇度を超える気候で、避難民キャンプの中はなんとも言えない悪臭が漂っています。清潔な水も十分な食料も確保できず、衛生環境も整っていません。もともと十分な栄養状態ではない避難民がそんな環境で生活していれば、病気にもなってしまいます。また、持病のある方々もその治療が中断されてしまっていました。ずっと飲んでいたお薬が無くなってしまった方や、受診できなくなり体調が悪化してしまった方もいました。

避難してきているのは六割が女性と子供だと言われています。女性の多くは妊婦さんや育児中のお母さん達です。定期的な妊婦健診など受けたことのない彼女たちは、低栄養や重度の貧血を抱えています。それでも少ない食料を小さい子供たちにあげてしまうのです。母子保健のニーズは非常に大きいことがわかりました。私たちは診療と並行して、こうした母子保健活動や衛生活動も行っています。それでも避難している人数が多すぎて、まだまだ状況の改善は見込めません。

活動はバングラデシュ赤新月社と日本赤十字社が協働して行っています。さらに避難民の中から英語ができる人を雇用して、現地スタッフとして活動してもらっています。国も言葉も慣習も違う私達でしたが、苦しんでいる人達を救いたいという同じ思いで活動ができるのが赤十字赤新月社の強みです。今回の経験はそれを強く実感することができました。

【避難民キャンプ】
どこまでも広がるテント。避難民の流入は現在もまだ止まっていません。

患者さんとお話をして、症状や困っていることを明らかにして、医師と診療を行い、投薬や衛生指導や患者さんの生活環境を整えることは、日本で行なっている看護と何ら変わりはありません。私が今回の活動を達成できたのも、こうした普段の知識や経験が活かされたと実感しています。そんな自分に育ててくれた、大学の先生方や職場の皆さんに深い感謝を感じています。経験したことは本当に、何一つ無駄にはなりません。どうか皆さんもそれぞれが持つ目標に向かって、色んな事に関心をもって取り組んでいただきたいと思います。

助産資格コースの先輩より

大学院（修士課程）助産学分野　助産学領域　助産資格コース

加地　靖菜 さん

学習内容としては、学部とは違い、自ら授業を行うことやディスカッションを行う機会が多くあり、受け身の授業だけではありません。そのため、助産学への学びをより一層深めることができると思います。実習では妊娠・分娩・産じょく期実習の他に、妊娠期から一カ月健診まで一人の女性と児を継続して看ていく継続実習や、ハイリスク妊婦・新生児を対象とする実習や開業助産所での実習もあり助産実践能力も身につけることができると思います。周産期のみならず女性のライフサイクルにわたる健康への支援について学ぶこともできます。忙しい時期もありますが仲間や教員に支えられ学びの多い毎日に充実感を感じながら日々を過ごしています。

若月　麻央 さん

大学院での学習は全員で話し合いをしながらの授業ですが、少ない人数でも楽しく参加できます。院の共通科目の授業は、仕事と両立しながらの助産以外の院生も一緒に授業をする機会があり、話し合いの中で臨床の方の生の声を聴く事ができます。臨床に出たことがない私にとって貴重な経験となりました。他の院生との授業は初めは緊張しましたが、みんなでご飯に行くなど楽しく学生生活を送る事ができています。実習は、お産の介助をさせていただくという初めての体験であり、ハードな実習ではありましたが、お母さんと赤ちゃんと家族との出会いに一喜一憂しながら乗り越える事ができました。改めて助産師の素晴らしさに気づけた期間でした。

津田真里奈 さん

私は、大学院の講義を通して、まだまだ未熟ですが看護の視野が広く、深くなったと思います。また、大学院の講義や実習は学生が主体的に行うものが多く、意欲次第で収穫できる知識・経験の重みが変わってきます。そのため、自分の協調性や主体性も成長できたと感じています。

私は、実習でお産を介助させていただき言葉では表しきれないほどの感動と産婦にとって助産師の存在の大きさを知りました。この経験から私は将来、〝この助産師さんがいてくれるから大丈夫だ〟と強く思ってもらえる安心感のある助産師になりたいです。そして、笑顔の絶えない、少しだけ面白い助産師になりたいです。そのため日々自己課題の克服に向けて頑張ろうと思います。

塚本　恵子 さん

大学院では、リプロダクティブヘルスや分娩に関するフィジカルアセスメント、根拠に基づいたケアなどを、講義や演習、実習を通して学んでいます。学部からずっと親しみのある教員から学ぶことが出来ることは大きなポイントです。もともと、母性領域に全く興味がなく、むしろ苦手としていましたが、実習から母性領域の魅力に惹かれ、女性の一生をサポートしていくことが出来る助産師になりたいと思い大学院へ進む決心をしました。周りにも驚かれ、決断した自分が一番驚いていますが、きっかけとなった夢を追いかけるために、関わらせて頂いたすべての方々からの学びや、仲間や教員から助けや励ましの中で、助産師になるために日々邁進しています。

加瀬　夢子 さん

大学院に入学して、一年が経とうとしています。大学院は学部に比べてさらに一日、一年が早く感じます。入学して四～八月は学内で勉強しながら、一、二週間ほどの実習で、分娩の場面を見学したり、妊婦さんやじょく婦さんを受け持たせていただいたりしました。その後は、分娩介助技術を仲間とひたすら練習し、九月半ばからは、いよいよ病院での分娩期実習となります。初めて赤ちゃんを取り上げ、臍の緒を切断する時は、手が震えるほど緊張していたのを今でも鮮明に覚えています。二人の命に携わることは不安なことも多いですが、一生の中の貴重な経験に携わることが出来ることに喜びと感謝の気持ちを忘れずに助産師を目指して頑張りたいと思います。

基礎看護学実習Ⅲ

基礎看護学実習Ⅲは二年次後期の科目として、十一～十二月に前半と後半に分かれて実施されました。二年前期の基礎看護学実習Ⅱに続いて、二度目の臨床の場での実習です。本実習はコミュニケーションや日常生活援助だけでなく、実際に疾患を抱えている患者さんと人間関係をつくり、患者さんを理解するための情報収集を行うなかで、現在抱えている問題、今後抱える可能性が高い問題を見出し、解決に向けてアセスメントを行っていくという内容の濃い実習です。

実習前セミナーとして、三年生の先輩から事前学習内容、実習グループメンバーや臨床指導者、担当教員との関わり方などについてアドバイスを受け、また病院実習前の二日間にわたり、今まで学んだ知識・技術を復習し、臨みました。

病院実習初日は、病棟オリエンテーション、受け持ち患者さんとの会話、カルテからの情報収集とあっという間、二度目の臨床の場とはいえ、緊張の連続です。患者さんを援助するための計画・準備、毎日の記録に追われ、自分への戸惑いや自らの力の無さを感じていく日々。しかし、受け持ち患者さんの前向きな言葉や態度に感動し、逆に励まされ、疾患や治療、入院前後の生活、家族との関係や患者さんの思いから、患者さんに必要な看護をアセスメントしていきます。アセスメントすることは非常に難しく、大変なことが大半だったと思いますが、患者さんの回復される様子や「ありがとう」の言葉が、患者さんの役立てた、頑張ってよかったという気持ちと同時に看護師を志す気持ちを高めてくれていたようでした。グループメンバーとは、卒業まで一緒に頑張っていこうという連帯感がでてきています。また、朝起きて病院に行き、行動計画発表、患者さんとの会話・援助、看護師への報告、グループカンファレンスを終えて、大学や自宅での学習といったスケジュールにも少しずつ慣れ、体調管理も身についてきたように思います。これまでの講義や演習で学んだ看護の知識・技術との繋がり、自ら学び行動することの意義を再確認しました。三年生からは長期の実習となります。この実習で学んだことを活かし、実践につなげていきましょう！

学生相談室より

今野睦子（こんの むつこ）

担　　当：毎週木曜日、月１回土曜日
◎相談室：管理研究棟１階　保健室
◎相談日：毎月掲示しています。
メ ー ル：counselor2@rchokkaido-cn.ac.jp

平成二十八年四月から相談室を担当しています今野です。宜しくお願いします。

皆さんが看護職への夢を叶えようと努力されている姿に敬意を払うと共に、同じ仲間として誇りに思います。初めてお会いしますので自己紹介を兼ねて、相談室の利用をお勧めします。

私が皆さんと同年代の頃、恥ずかしながら看護という専門職のイメージはなく、医師の補助的な役割と言う認識でした。そこにはこころを煩った人間としての存在を意識することはありませんでした。その考えが少し変わったのは、実習で「話しを聞いてくれてありがとう」の患者さんからの一言でした。単純に精神科は楽しそうだ！と思いました。

それから四十年近く、気が遠くなるほど努めることができたのは、そこで出会った一人一人の患者さんを好きになったからでしょうか。一緒に笑ったり、泣いたり、怒ったり、切ない気持ちになったり等々、こころと共にそこで生きている様々な人生そのものを教えられました。また、自身の悩みでモヤモヤしているときも、患者さんとの関わりのなかから、答えを見いだせたり、癒されたりもしました。

この経験は「人間を救うのは、人間だ」の精神を実感すると共に、それが真実だからでしょう。此まで看護を通じて多くの人に支えられ導かれた事へ感謝すると同時に、この思いを皆さんと共有したいと思っています。

保健室は自身の悩み事だけでなく、実習でのアプローチなどで悩んでいる貴方！臨床で学んだ経験を広く皆さんに提供し活用して頂きたいと思います。

思い立ったら予約が無くても大丈夫(^^)直接お越し下さい。お待ちしています。

四年生へのお祝い

四年生の皆さん、卒業おめでとうございます。担任を代表して四年間皆さんを見てきた村林からお祝いの言葉をお贈りします。皆さんが本学に入学した時、希望に満ち溢れていたことでしょう。四年間の学生生活いかがでしたか。高校とは違い私生活まですべて自分でこなさないといけないこともありましたね。自由な反面、自分の言動に責任も伴うことも学んだはずです。医療系ゆえに講義・実習の量も多く課題・記録・試験勉強も大変だったと察します。しかし、皆さんが本学で得た学びは、ご自身の成長の糧となっていると信じております。四年前の希望が現実となったことを願っております。個人的には担任として至らなかったことは多々あったと思いますが、皆さんと四年間一緒に過ごせたことを幸せに思っております。最後に皆さんの栄えある門出に向けて一言。Girls and boys, be ambitious!

平成29年度 保護者会

平成二十九年十月二十二日（日）に本学において保護者会が開催されました。一年生から四年生までの九十四名の保護者の皆様にご参加頂きました。遠方からお越し頂いた方もおり、大変感謝しております。保護者会の内容につきましては、本学の概要について説明があった後、希望された方には施設見学及び学年担任による個別面談を実施いたしました。実施後にご記入いただきましたアンケートでは概ね良い評価をいただけましたが、日程の通知時期等についてご要望をいただきました。これらのご意見を参考にして、今後も保護者会の充実を図って参ります。来年度もたくさんの保護者の皆様のお越しをお待ちしております。

平成29年度 ふらっとカフェ

平成二十九年十二月二十日（水）の昼休みに本学食堂前の学生ホールにて、学生の皆様がふらっと立ち寄って、飲み物や茶菓子を味わいながら歓談できるようなカフェ「ふらっとカフェ」を開催いたしました。学生約六十名、教員約十五名の方々にご参加頂きました。ふらっとカフェは「平成二十六年度 学生生活実態・満足度調査」の結果において、学生と教員の交流の場を設けてほしいとのご要望があったことから、学長をはじめ教職員との交流を目的として平成二十七年度より年に一回開催しております。今後も学生と教職員の交流の場として、ふらっとカフェの充実を図って参ります。来年度もたくさんの学生の皆様のご参加をお待ちしております。